

地域は往来で成り立つ！ ご縁が紡ぐ 地の縁、人の縁、事の縁



地域・産業研究所
所長
田中孝治 さん

富士山静岡空港の 就航先とご縁を探す

聖一國師せいいつくにしをテーマにして、歴史を活かすには、どういうふうにご縁を探すか、どういふふうにご縁を紡ぐかをお話しさせていただきます。と思います。

静岡大学と常葉大学の学生たちに「歴史を知ることと同時に、歴史を活かすことが重要ではないか」と話してきました。

物事の発端は、地の縁、人の縁、事の縁と、縁が紡いできたという思いがします。人が2時6宿を行き交うことでできた歴史を考えると、地域は、往来によって成り立つのではないかと。静岡は、往来の中で発展した都市です。

コンベンション都市の玄関口としての空港を提言し、静岡県民間空港開設研究会をつくり、JICの方々を中心に空港建設運動を進めて、静岡空港を実現しました。

空港をつくったという歴史を、空港をつくって良かったという歴史に

しなければいけない。空港の就航先とご縁を探して、発展につなげていこうと始まったのが、聖一國師をテーマとした交流です。

「博多祇園山笠は駿河の 聖一國師が始めた」 を発端に

空港開港の半年前、福岡にポー
トセールズに行きましたが、なかなか静岡を向いてくれませんでした。その時に、人のご縁で、「博多祇園山笠は駿河の聖一國師が始めた」とみんな言っている。これを材料にした方がいいのではないですか」と言ってくれる方がいて、当時の博多祇園山笠振興会の会長さん、榎田神社の宮司さん、承天寺しょうてんじのご住職、菓子工業組合の組合長さんをご紹介いただきました。お会いして、お話しするうちに「わかった」と言っていただけでした。

「聖一國師のご生家が残っているのなら、その水をくんできて、勢い水として掛けたらどうだ」と言わ

れたのが、一番の発端でした。米沢さんの家の横を流れている沢から水をくんで、JALの最初の便に樽を乗せて、福岡に行つて、静岡市長と私がお渡しして、水をまいたのだいた。ここから博多の方々に、ご縁のつながりが広がっていきました。

2009年開港当初、福岡便は1日1往復でしたが、2018年の現在では、静岡から静岡商工会議所会頭をはじめ60名が祭りに参加し、静鉄ホテルプレジオが博多駅前オープンし、FDAが1日4往復を維持できています。歴史のご縁を活かしながら、共通するテーマでおつきあいをしていくひとつの例になると思います。

民間貿易が盛んだった 中世博多

中世博多には、鴻臚館こうらくわんがありました。平安時代に設置された外交施設で、中国から来た外交使節を泊めて、取引しました。

場所は、福岡城址の中で、その前は海です。当時は、承天寺も、榎田神社も、筥崎宮はこざきみやも、海岸線沿いに並んでいました。

平安時代の末期には、中央政府の権力が弱くなって、中国の南宋の

人たちと日本人が混在して、民間貿易を始める時代が来ます。

そこに登場したのが謝国明という商人のリーダーです。聖一國師の教えに帰依しただけでなく、承天寺に土地を寄進し、建て直し、聖一國師が修行した径山萬壽寺きんざんまんじゆじが焼けると寄進しています。

当時のお寺は、現在の商社の役割を担っていました。1975年に韓国の全羅南道沖で発見された沈没船の中から、1323年の京都の東福寺の荷札が発見されました。東福寺が貿易船を動かす、その船には青磁器9842個、白磁4926個、銅銭800万枚が積み込まれました。鎌倉時代は禅宗がさかんになる時代で、各寺院はおカネが必要だったので、貿易船のスポンサーになっていた。貿易の実務は、承天寺の塔頭。本社が東福寺、支店が承天寺の塔頭という形で、貿易が行われていました。

創業と再建の専門家 としての聖一國師

この頃、博多に疫病が流行つて、聖一國師が台に乗って、清めの水をまいたのが、博多祇園山笠の始まりと言われています。